

第 31 回目 新しい人を身に着る (3)

はじめに

●「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着る」(4 章 22, 24 節)ということについて、今回はその第三回目です。「新しい人」とは「神にかたどって造り出された、新しい人のこと」です。つまり、神の子どもとされたクリスチャンのことです。「新しい人を着る」ことを、換言するならば、「キリストのように生きること」「キリストの心を心とすること」と言えます。つまり、

(1) キリストが神(御父)を信頼したように、神を信頼すること。

(2) キリストが神(御父)を愛し、人を愛されたように愛のうちを歩むこと。

しかしこれは、いわば総論的なものです。今回から、その各論、つまり具体的な面について取り上げていきたいと思えます。

●「キリストのように」生きること—確かに、神様はありのままのあなたを愛しておられます。神が愛しておられるのは、欠けだらけのままの私たちです。たとえ私たちが、神をはねつけても、無視しても、拒絶しても、馬鹿にしても、従わなくても、あなたに対する神の愛は変わりません。私たちの行いの善し悪しで神の愛を強めたり、弱めたりすることはできないのです。私たちが失敗したからといって、神の愛が閉ざされることもないし、逆に成功したからとて神の愛が増すわけでもない。神はありのままの私たち(あなた)を愛しておられるのです。けれども、大切なことは、神はあなたをそのままにしてはおかれぬということです。神様は、私たちがイエシュアのように、キリストのようになることを望んでおられます。神は私たちを「御子の姿にしよう」とあらかじめ決めておられるのです。今回も、そのことを、共に、学んでいきたいと思えます。

●私たちがどのような面において、新しい人を着て、キリストのようになるべきか、エペソ人への手紙 4 章 25 節と 29 節をピックアップしてお話したいと思います。まずはその聖書の箇所を見ましょう。

4:25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。

4:29 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。

1. 偽りを捨て、真実を語る (偽りの人生から、真実な人生へ)

●「イエス・キリストのように生きる」、その具体的な面のひとつは、「偽りを捨てて、真実を語る」ということです。嘘や偽りやごまかしという古い人を脱ぎ捨てて、真実を語るという新しい人を着ることです。「嘘」は必ずバレるものです。そのとき、その嘘を信じていた人はどういう反応を示すでしょう。おそらく常識的には、

嘘をついた人に対して腹を立て、怒るでしょうね。そしてその人を信用しなくなります。相手にしなくなります。

「嘘」は、やがて人との信用を失わせ、かかわりの絆が断ち切られてしまう運命にあります。ですから、「あなたがたは偽りを捨て」と言われているのです。ちなみに、「古い人を脱ぎ捨てる」の「脱ぎ捨てる」ということばと、「偽りを捨て」ということばの「捨てる」とは同じことば(「アポティセーミ」 ἀποτίθημι)です。その理由は、「私たちはキリストのからだを建て上げる」という尊い使命があるからです。からだはそれぞれの部分互いに信頼しながら繋がっています。どこかが通常の働きや役割をしなくなったりするならば、全体の調子がおかしくなってきます。からだの比喻(たとえ)は、それぞれが裏切ることなく、それぞれの器官が互いに助け合ってひとつの全体を生かしているという意味です。

(1) 偽りを捨てる

●神の敵であるサタン(悪魔)のことを、聖書では「偽り者、偽りの父」(ヨハネ 8:44)と言っています。その「偽りの父」は実に狡猾でした。そして、最初の人であるアダムとエバに近づいてこう言いました。

【新改訳改訂第3版】創世記 3章 1～5節

- 1 さて、神である【主】が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」
- 2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。」
- 3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」
- 4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。」
- 5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

●彼らは蛇の言った言葉を信じてしまいました。そして木の実を食べてしまったのです。善悪の知識の木の実を食べることによって、その善悪を自分の基準で計ってしまうという結果をもたらしました。・・・やがて彼らは、神様から「いったいなんということをしたのか」と叱責されます。しかしアダムは、「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」。エバはエバで、「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べました。」このように、二人とも自分は悪くないとそれぞれが、「この女が」「蛇が」と責任転嫁をしています。サタンによって最初の夫婦の絆にひびが入ってしまったのです。このように、人間はサタンの嘘を容易に信じますが、逆に、神の真実が語られてもなかなか容易には信じられない存在となってしまったのです。夫(「イーシュ」 אִישׁ)と妻(「イツシャー」 אִשָּׁה)は、主(「ヤー」 ה')にあって一体となるべく造られました。つまり、「夫」と「妻」を意味するヘブル語の語彙の中に、夫と妻が主によって結び合わされていることが隠されています。しかし一体となるべく造られた二人の間に、「主」が抜け落ちる(失われる)と、そこに残るのはなんと「火、炎」を表わす「エーシュ」(אֵשׁ)です。その「火」は「怒り」や「さばき」としてのイメージです。この火は信頼し愛し合うべきかかわりの中に、「偽り」が入ったことによってにもたらされます。

●サタンは「偽りの父」です。人はこの「偽りの父」に打ち勝つことができません。「偽りを捨てよ」と聖書は

命じていますが、「偽り」の陰には、必ずサタンの働きがあるのです。

(2) 真実を語る

エペソ 4:25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。

私たちはからだの一部として互いにそれぞれのものだからです。

●さて、口で語られる嘘や偽りを捨てて、積極的に「真実を語る」ことが求められています。「おのおの隣人に対して」とは世間一般の隣近所という意味ではなく、同じ信仰を持つ兄弟姉妹に対してという意味です。

●真実を語るということは決して簡単ではありません。知恵が必要です。たとえば、医者ががん告知をする場合、真実を語って、その患者が失望して生きる気力をかえって失ってしまうかもしれません。牧師が教会員の個人の秘密をすべて語ってしまったとしたら、つまづく人も出てくるかもしれません。知っている「真実」を配慮なくぶちまけてしまうならば、「ウッソー、信じられない、あり得ない」と反応されて、取り返しのつかない混乱と誤解が生じるかもしれません。「真実を語る」ということは必ずしも容易なことではないのです。イエシュアも弟子たちに対してこう言われました。「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今、あなたがたにはそれに耐える力がありません。しかし、真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。」と言われました(ヨハネ 16:12,13 節)。このように、私たちも「隣人に対して真実を語る」のに、時をかけ、良い時期を選ばなくてはならなのです。真実を語る場合でも、愛を伴った「心配り」が必要なのではないかと考えます。

●また「何が真実であるか」という理解についても、決してだれでも正しく理解できているとは限りません。たとえばサマリヤの女の真実はなんでしょう。ある人にとって彼女の真実は、かつて 5 人の夫がいたけれども、今は、夫ではない男性と同棲しているということかもしれません。ある人から見る彼女の真実とは、男なしには生きていけない性的依存症だということかもしれません。しかし、ある人の理解における彼女の真実は、本当の愛を知らないでその愛に渴きつつ、求めているということかもしれません。どれが真実なのでしょう。人によって真実の捉え方が異なります。したがって、「偽りを捨てて、真実を語りなさい」という命令の真意を正しく理解せず、それぞれが真実だと思うことを語ったとしたら大変なことになります。

●時には偽りを言うこともなく、また、敢えて、真実を語らないことが愛の配慮であることもあると思います。みことばの真意は何かを考えなければなりません。いずれにしても、互いのきずなを破壊することなく、建て上げるために、何が真実であるかを見極める必要があります。安易にこれが「真実だ」と思わないこと、慎重さが必要です。人の見える部分ではなく、その背後にある面にも心を配る必要があるとなると、そう簡単には真実は見えてこないかもしれません。また、お互いにとって、徳を高める(からだを建て上げる)方向において、真実を受けとめる心の備えが必要です。その意味において、「あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。」というパウロの勧告を考えていく必要があります。「真実を語りなさい」の「語りなさい」という命令は文法的には現在形で、「語り続けなさい」ということです。

●イエシュアは人の心の内をすべて見抜いたうえでかわりをもたれました。人が必要としている渴き、必要(ニーズ)に敏感でした。真実を知った上でかわりをもたれた方です。そのイエシュアのあり様を私たちは学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

2. 人の徳を養うのに役立つことばを話す

●新しい人を着て、「キリストのように」生きるということについてのさらなる面を見てみましょう。それは4章29節のことばがそうです。

悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。

●25節では「偽りを捨てて」という消極的・否定的な面と、「互いに真実を語りなさい」という積極的な面について語られていましたが、29節では「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません」という消極的な面と、「ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」という積極的な面とが語られています。もしこれを実行しようとするならば、交わりがぎくしゃくしてしまうかもしれません。事務的な話しかできなくなりそうです。人によっては何も語れなくなりそうです。悪い言葉を口から出さな。必要な時だけ、人の徳を養う言葉だけを語りなさい。聞く人に恵みを与えないようなことばを話してはいけません。・・・だれも話せなくなりますね。・・・特におしゃべり好きな人にとって、教会の交わりは牢獄のような場所となってしまうかねません。思うことを話せないなんて・・・。

●そうではありません。おしゃべりをしても良いのです。思うことをなんでも話してもいいのです。車のハンドルも「あそび」というゆとりがあります。そうでないとちょっとした動きでも車は反応してかえって危険です。特に、スピードが出ている場合は・・・。

(1) 悪いことばをいっさい口から出さな

●29節のことばの意味を正しく理解しましょう。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。」の中の「出してはいけません。」とは、文法的に現在形の命令で「出し続けてはいけません」という意味です。ところで、「悪いことば」とはいったいどんなことばなのでしょう。「悪い」と訳された原語のギリシア語は「サブロス」(σάπρος)という形容詞で、それは「腐った、汚れた、悪臭を放つ」という意味があります。共同訳聖書では「人を傷つける言葉」と訳しています。柳生訳では「口汚い言葉」となっています。人に害を与えるような、人の存在を傷つけるような発言、そのようなことばはみんな注意し合っていかなければなりません。牧師も時には、そのような人の心や存在を傷つけるような発言をするかもしれません。そのときにはみなさんの方から、「それは良くないことばではありませんか。」と強く注意してくれることが大切です。特に教会での交わりや愛餐会ではこうしたあり方が求められていると思います。「悪いことばをいっさい口から出してはいけません。」と命じられています。腐った食べ物を食べるとどうなりますか。おそらくお腹をこわして下痢を起こすで

しょう。そのような「腐ったことば」が「悪いことば」です。「悪いことば」は「腐った心」から出てくるのです。

●どうしても心の悩みや誰かの悪口を言いたい場合には、人を選んで聞いてもらうことが必要です。そうしたことばは聞く者に対して決して「恵み」を与えることにはなりません。本来、「腐ったことば」ですから。場合によっては、聞く者の心に大きな負担を与えてしまい、心にまで悪い影響を与えかねません。ですから相手を選びましょう。相手を選ぶと言っても、それを共に喜んでくれるような相手では困ります。それこそサタンの思う壺です。この壺にハマってはなりません。

●「悪い言葉」を聞いた者は、「あの人、こんなことを言っていたよ。」と公に、あるいは他の人に言いふらしてはいけません。話す者も、秘密を守れる、口の堅い人にもみ話すべきです。話す相手を間違えると自分にも災いとなって帰ってくるかもしれません。できることなら、あらゆる悪い言葉、腐ったことばが、あなたの口から外に出ることがないようにしなければなりません。問題は、つい、「口から出てしまう」ということです。ヤコブ書に、「私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗しない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。・・・しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。」ですから、最小限の心がけは、とにかく口を慎むことです。なるべく黙っているに越したことはありません。ことばで失敗した政治家は多いです。「隣人をさげすむ者は思慮に欠けている。しかし英知のある者は沈黙を守る。」(箴言 11:12)とあるように、「沈黙は金」のようです。

(2) 必要なとき、人の徳を養うのに役立つ言葉を話さない

●しかしここ(エペソ書)では、いつも沈黙していれば良いというのではなく、「必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」という積極的な面が勧められています。ここでも動詞は一つで、「(ことば)を発し続ける」ことで、そのことばとは「人の徳を養うのに役立つことば」、「聞いている人々に恵みを与えるためのことば」です。人の「徳を養う」と訳されたことばは、建築用語の「建て上げ」という名詞「オイコドメー」(οἰκοδομή)が使われています。「役立つ言葉」とは「悪い言葉」の反対、つまり「腐ったことば」の反対で、人を建て上げていくための「良い」言葉です。とすれば、「教会を建て上げる」という目的のためには、話すことばが非常に重要になってきます。

●コロサイ人への手紙 4 章 6 節では、「いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。」とあります。ここで「塩味のきいたもの」とはどういう意味でしょうか。聞く相手に信頼感(好感)を与えるような言葉の持ち味のことでしょうか。塩は「腐ることを防ぐとともに、味を付け、味を調える」上でとても大切なものです。「腐ったことばが口から出ることなく、逆に味わいのある言葉を話すこと」を勧めていると信じます。「こうしてはいけません。あれもいけません。」ということではなく、聞いている人の徳を建て上げるようなことばです。とすれば、具体的にどんなことばになるのでしょうか。そのためには、私たちがキリストに学び、キリストのように生きることを心がけているならば、おのずと、良いことばが、恵みを与えるようなことばが、塩味のきいたことばが口から出てくると信じます。